

V) 病害虫発生経過の概要及び発生原因の解析

農作物名	病害虫名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イネ	いもち病	葉いもち遅い、穂いもち遅い	やや少ない	葉いもちの初発生は遅く、全般発生は平年並みとなった。例年感染が活発化する7月上中旬の発生量はやや少なかった。穂いもちの発生量も平年に比べてやや少なかった。	伝染源となる汚染種子の割合が少なかったことに加え、梅雨期が5月28日～7月6日ごろと短かったため、葉いもちの発生がやや抑制され、この結果、穂いもちの感染もやや少なくなったものと考えられる。	常習発生地では育苗箱施薬が行われた。また、発生に応じ薬剤散布が行われた。
	紋枯病	やや遅い	やや少ない	初発生は平年よりもやや遅く6月18日に認められた。その後の病勢進展は緩慢であった。7月下旬以降、早生種栽培圃場では上位進展も活発で、止葉葉鞘にまで病斑形成が及んだ発病程度の高い圃場も散見されたが、主要品種コシヒカリを含む全般の発生量は、平年に比べてやや少なかった。	初発後病勢進展が緩慢となったのは、梅雨期期間中の降雨日数が少なく、感染に好適な日が続かなかったためと考えられる。	常習発生地では育苗箱施薬が行われた。また、発生に応じ出穂期までに薬剤散布が行われた。
	縞葉枯病	—	多い	22年ぶりの広域的な発生となった。普通期栽培早生種きぬむすめにおいては、7月中旬頃からゆうれい症状を呈する被害株が顕在化した。極早生種では出穂期以降、穂の出すくみ症状が明瞭となった。品種間で発病程度に差が認められ、出穂の遅いきぬむすめで重症株が確認されたが、極早生種のはなエチゼンやコシヒカリでは発病程度は低かった。	近年ほぼ皆無であった中での突発的な発生であり、かつ広域的な発生をみたことから類推して、保毒虫の飛来による伝搬活動の結果と考えられる。	縞葉枯病発生地域においては、感染予防として発病株の除去の他、基幹防除の徹底による媒介虫のヒメトビウカに対する防除が行われた。また、収穫後ひこばえで感染が確認された圃場では早期の秋起こしにより、伝染源の低減が図られた。
	セジロウンカ	平年並	少ない	予察灯での初飛来は平年並みの6月下旬から認められ、6～7月の飛来量は平年に比べてやや少なかった。これに由来する幼虫は7月中旬から発生し、発生量は平年に比べて少なかった。	7～8月の気温は高く経過し、増殖に好適な状況であったが飛来量が少なかったため全般に発生は少なくなったと考えられる。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、出穂時に葉いもち・ウンカ類の同時防除が行われた。
	トビウカ	—	少ない	予察灯では飛来を確認できなかった。きわめて少ない飛来がセジロウンカと同時にあったと考えられ、これに由来する幼虫が7月下旬から発生したが、発生量は平年に比べて少なかった。収穫期まで成幼虫密度は低く経過し、坪枯れ被害の発生は少ない。	梅雨明けまでの飛来量が過去10年で最も少なかった。7～8月の気温は高く経過し、増殖に好適な状況であったが被害発生は極めて少なかった。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、出穂時に葉いもち・ウンカ類の同時防除が行われた。
	斑点米カメムシ類	平年並	やや多い	畦畔雑草すくい取り（6月下旬：頭数6.4頭/10回振・発生圃場率36%、前年1.2頭・33%）、早生品種出穂時（7月下旬：9.0頭/20回振・87%、前年5.1頭・59%）の各調査では、発生量は平年に比べて多かった。主な発生種はホソハリカメムシ、アカスジカスミカメであった。10月30日現在、うるち玄米総検査数量に対する、カメムシ類が原因の着色粒混入による格落ち数量割合は4.2%である。	発生要因として、前年の発生量は平年並みで、越冬量も平年並みであったと推察される。しかし、梅雨明けが平年に比べて2週間ほど早まり、7月上旬から8月中旬まで降水量は少なく、平均気温も高く経過したため、カメムシ類の雑草上での増殖、ほ場への侵入、増殖が助長されたと考えられる。このため極早生品種を中心に斑点米被害が認められた。	7月30日付けで注意報を発表した。発生に応じて穂揃い・乳熟期～糊熟期に薬剤散布が行われた。
	カメイトチュウ第1世代第2世代	—	少ない	全般の発生量は平年に比べて少ない。	前年の発生から、越冬量は少なかったものと考えられる。	常習発生地では薬剤散布が行われた。
	ツマグロヨコバイ	平年並	平年並	第1世代成虫の発生時期は平年並であった。払い落とし調査では6月までは発生虫数、圃場率とも平年に比べて少なかったが、7月以降は発生量が増加し、一部では多発生の圃場が見られた。	越冬量が少なかったため前半の発生量は少なかったが、全般に気温が高く推移したために圃場での増殖が盛んとなった。この結果、収穫期には発生程度の高い圃場が多くなったと考えられる。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われており、出穂時にはいもち・ウンカ類の同時防除が行われた。
ヒメトビウカ	平年並	平年並	3月末の越冬量調査、5～6月下旬の払い落とし調査では、捕獲虫数、発生圃場率ともに平年並みの発生量であった。	6月上旬頃にウイルス保毒率の高い個体群が飛来したと考えられる。	大部分の圃場では育苗箱施薬が行われている。縞葉枯病被害地域では基幹防除の徹底、被害株の抜き取り、草刈り、早期の秋起こしが行われた。	

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
イネ	イヌシノムシ	平年並	やや少ない	予察灯における越冬世代成虫の初誘殺は、平年並みの5月第1半旬に認められたが、誘殺数は少なく、5月下旬の巡回調査では、発生圃場率、被害株率とも平年に比べてやや少なかった。	越冬量の減少と本田初期害虫との同時防除で発生が抑制されたと考えられる。	育苗箱施薬が行われた。多発田では本田防除が行われた。
	コブノメイガ	平年並	少ない	予察灯での飛来時期は平年並みで次世代の発蛾盛期は8月第2半旬であった。しかし飛来量が少なかったため、次世代の発生量、被害株率、発生圃場率は平年に比べて少なかった。	次世代発蛾盛期には、大部分の水稲は出穂しており、その後の被害発生は少なかったものと考えられる。	発生に応じて薬剤散布が行われた。
ムギ	さび病	早い	やや多い	オオムギは3月下旬に、コムギは4月下旬に発生が確認された。一部地域では発病程度の極めて高い地域が認められた。全般の発生量は平年に比べてやや多かった。	3～4月の気温が高めに推移したため、発生が助長したものと考えられる。	本病を対象とした防除は特に行われなかった。
	赤かび病	—	平年並	巡回調査では5月下旬に発生が確認された。病勢は比較的緩慢で、平年並みの発生となった。	—	オオムギでは例年より10日程散布時期を遅らせ、穂揃い期10日後とさらにその10日後に薬剤防除が行われた。
	うどんこ病	—	やや少ない	オオムギで発生が認められたが、発病程度は低く、全般の発生量は平年に比べてやや少なかった。	近年発生が少ないことから、伝染源量が少ないものと考えられる。	他の病害との同時防除が行われた。
ダイズ	ハモンヨウ	やや遅い	やや少ない	フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は8月下旬まで少なかった。その後、累積誘殺数は10月末には東部では平年の3割程度、西部ではほぼ平年並みでになった。圃場での幼虫の発生は8月第4半旬からみられ、1a当たりの白変葉箇所数は9月末には6箇所以上観察される圃場もみられたものの、全般には1.3箇所と平年(2.5箇所)よりやや少ない発生であった。	成虫の飛来量がやや少なかったため、幼虫の発生量もやや少なくなったものと考えられる。	発生に応じて薬剤散布が行われた。
	吸実性カメムシ類	平年並	平年並	全般の発生量は平年並みであった。	—	落花後から発生に応じて薬剤散布が行われた。
	アブラムシ類	—	やや少ない	全般の発生量はやや少なかった。	—	他害虫との同時防除が行われた。
ナシ	黒斑病	遅い	少ない	発生量は6月下旬まで平年並みに推移していたが、その後、病勢は鈍化し平年に比べて少なくなった。	6月下旬までは降水量がほぼ平年並みに推移したため、発生量が平年並みであった。しかし、その後の降水量が少なく推移したために病勢が鈍化し、全般の発生量は平年に比べて少なくなったと考えられる。	袋がけ時期を中心に薬剤散布がよく行われた。以後、収穫期まで薬剤散布が行われた。
	黒星病	平年並	やや多い	5月下旬から発生が認められたが、全般の発生量は平年に比べてやや多かった。	5月の気温が平年に比べて低く推移したために感染が助長されたと考えられた。	薬剤による防除が行われた。
	ハダニ類	平年並	平年並	ハダニ類の発生量は4月下旬の花叢への寄生率はやや高かったが、その後発生は少なくなった。全般の発生量は平年並みとなった。	カンザワハダニの越冬量はやや少なかったが、クワオオハダニの越冬量が多かったため、4月下旬に花叢への寄生が平年より高くなったと考えられた。その後、5月、6月はやや少なくて推移したが、7月および8月下旬には降雨も少なく、密度が増加し平年並みとなったと考えられた。	5月下旬～6月、7月上旬、8月上中旬を中心に薬剤散布が行われた。
	モシクイ	やや早い	やや多い	フェロモントラップでの越冬世代、第1世代雄成虫の誘殺時期はやや早く、誘殺数はやや多かった。果実の被害は全般には平年並みであった。	前年の発生がやや多く、越冬世代成虫の発生量がやや多かったと考えられる。また、4月の気温はやや高く発生時期はやや早くなった。発生量はやや多かったが、本県ではほとんどが有袋栽培のため果実の被害は平年並みとなったと考えられる。	ナシヒメシンクイ、ハマキムシ類との同時防除が行われた。

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
ナシ	ナシミシクイ	やや早い	やや多い	フェロモントラップでの越冬世代、第1世代雄成虫の誘殺時期はやや早く、誘殺数はやや多かった。果実の被害は全般には平年並みであったが、一部被害の多い圃場がみられた。	3月中下旬、4月は気温が高く、越冬世代成虫の発生時期はやや早くなった。越冬量がやや多かったことから、各世代の発生量はやや多くなったものと思われる。しかし、本県ではほとんどが有袋栽培のため果実の被害は平年並みとなったと考えられる。	小袋掛け前に他害虫との同時防除が行われた。
	アブラムシ類	平年並	やや少ない	4月下旬の寄生梢率、寄生程度はやや低く、5月下旬には寄生新梢率、寄生程度ともやや少なかった。全般の発生量はやや少なかった。	4月中旬の気温がやや高く経過したが、発生時期は平年並みであった。その後、降雨等の影響もあり発生はやや少なく推移した。	5～6月に薬剤散布が行われた。
	ハマキムシ類	やや遅い	やや少ない	フェロモントラップでのチャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生時期は越冬世代で、やや早かった。チャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生量はやや少なく、幼虫による被害もやや少なかった。	4月上旬の気温はやや低く、越冬世代の発生時期はやや遅くなったと考えられる。5月、6月の気温はやや低く推移し、第1世代以降の発生もやや遅く、発生量も少なくなった。	他害虫との同時防除が行われた。
	クワカクアブラムシ	—	少ない	全般の発生量は少ない。	—	防虫果袋が使用された。
	カメムシ類	平年並	平年並	フェロモントラップでは5月1日に、予察灯では5月5日から誘殺された。その後、誘殺数は平年並みに推移した。予察灯では8月下旬から9月上旬にかけて誘殺数の増加が認められたが、誘殺数は平年並みであった。被害果実は8月下旬から認められ、平年に比べて少なかった。	昨年はヒノキ毬果が平年並みでカメムシの越冬量も平年並みと考えられた。また、本年はヒノキの花粉飛散量から毬果は平年並みと推察され、この結果、圃場への飛来は平年並みになったものと考えられた。	他害虫との同時防除が行われた。防虫果袋が使用された。
カキ	炭疽病	平年並	やや少ない	全般の発生量は平年と比べてやや少なかった。	7月、9月の降水量が平年に比べて少なく推移したためと考えられる。	一部に無防除や薬剤散布の遅れた園が見られた。
	うどんこ病	遅い	少ない	7月下旬に初発を確認した。全般を通して発生量は平年に比べて少なかった。	7月～9月の気温が平年に比べて高く推移したためと考えられる。	薬剤散布の回数の少ない園や散布の遅れた園も見られたが、全般には適切な防除がなされた。
	カキミガ	平年並	平年並	果実の被害は一部で多発生圃場が認められたが、全般の発生量は平年並みであった。	防除効果の高い薬剤が適期に散布されたためと考えられる。	各世代発生期に薬剤散布が行われた。
	タテアザミマ	平年並	平年並	5月6日に被害捲葉の発生を認めた。発生量は平年並みであった。第1世代成虫は6月第2半旬から粘着トラップに誘殺され、誘殺数は平年に比べてやや少なかった。果実被害は7月中旬から見られたが、被害量はやや少なかった。	越冬成虫の飛来量が平年並みであったこと、成虫飛来時期の薬剤散布と被害捲葉の除去などの防除対策により、果実被害の発生量は少なかったと考えられる。	越冬成虫飛来期の薬剤散布と捲葉の切除が行われた。
	カメムシ類	平年並	平年並	フェロモントラップでは5月1日に、予察灯では5月5日から誘殺された。その後、誘殺数は平年並みに推移した。予察灯では8月下旬から9月上旬にかけて誘殺数の増加が認められたが、誘殺数は平年並みであった。被害果実は8月下旬から認められ、平年に比べて少なかった。	昨年はヒノキ毬果が平年並みでカメムシの越冬量も平年並みと考えられた。また、本年はヒノキの花粉飛散量から毬果は平年並みと推察され、この結果、圃場への飛来は平年並みになったものと考えられた。カメムシ類に対する防除を8月中下旬に行ったため圃場での被害はほとんど認められなかった。	8月中下旬に薬剤による防除が行われた。
	ハマキムシ類	やや遅い	やや少ない	フェロモントラップでのチャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生時期は越冬世代で、やや早かった。チャハマキ、チャノコカクモンハマキの発生量はやや少なく、幼虫による被害もやや少なかった。	4月上旬の気温はやや低く、越冬世代の発生時期はやや遅くなったと考えられる。5月、6月の気温はやや低く推移し、第1世代以降の発生もやや遅く、発生量も少なくなった。	他害虫との同時防除が行われた。
	夏秋キャベツ	黒腐病	—	少ない	巡回調査地点での発生量は生育期間全般を通じて少なかった。	栽培期間中の台風害等による葉の傷害がなく、感染機会が少なかったものと考えられる。
	菌核病	—	平年並	9月下旬には発生が認められ、全般の発生量は平年並みであった。	—	薬剤による防除が行われた。

農作物名	病虫害名	発生時期	発生量	発生経過の概要	発生原因の解析	防除の概要
夏秋キャベツ	ハスモンヨトウ	やや遅い	やや少ない	フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は8月下旬まで平年並み～やや多かった。その後、累積誘殺数は10月末には東部では平年の3割程度、西部ではほぼ平年並みでになった。圃場での幼虫の発生は8月第4半旬からみられ、全般にはやや少ない発生であった。	成虫の飛来量が少なかったため、幼虫の発生量はやや少なくなったものと考えられる。	発生に応じて薬剤散布が行われた。
	コナガ	—	平年並	幼虫の発生量は全般に平年並みであった。	—	定植時の粒剤施用と、その後は他のチョウ目害虫との同時防除が行われた。
冬キャベツ	黒腐病	—	少ない	発生圃場は僅かで、発病程度も低く、全般の発生量は平年に比べて少なかった。	—	薬剤による防除が行われた。
	菌核病	—	平年並	一部で発病程度の高い圃場もみられたが、全般の発生量は平年並みであった。	—	薬剤による防除が行われた。
	ハスモンヨトウ	やや遅い	やや少ない	フェロモントラップによる雄成虫の累積誘殺数は8月下旬まで平年並み～やや多かった。その後、累積誘殺数は10月末には東部では平年の3割程度、西部ではほぼ平年並みでになった。圃場での幼虫の発生は8月第4半旬からみられ、全般にはやや少ない発生であった。	成虫の飛来量が少なかったため、幼虫の発生量はやや少なくなったものと考えられる。	発生に応じて薬剤散布が行われた。
	コナガ	—	平年並	幼虫の発生量は全般に平年並みであった。	—	定植時の粒剤施用と、その後はハスモンヨトウとの同時防除が行われた。
タマネギ	白色疫病	—	平年並	3月下旬には県下各地で発生がみられ、平年並みの発生量であった。4月上旬以降は、気温の上昇に伴い、例年並みに病勢は鈍化、終息に向かった。	—	発生に応じて薬剤散布が行われた。
	べと病	—	やや多い	3月下旬における越年罹病株の発生量はほぼ平年並みであったが、その後、二次感染株の発生量が急増、発病株率は過去10年で最も高くなった。5月に入ると病勢はやや鈍化したものの、発病株率は平年に比べて発生量はやや多くなった。	4月に降水量がやや多くなったことため、二次感染株の発生量が急増したものと考えられる。	5月1日付けで注意報を発表し、発生状況に合わせた薬剤散布が行われた。
	さび病	—	平年並	県内各地で発生がみられたが、全般の発生量は平年並みであった。	—	本病を対象とした薬剤散布は行われなかった。
イチゴ	灰色かび病	—	やや多い	県内各地で発生が認められ、全般の発生量は平年に比べてやや多かった。	3月の気温が平年に比べてやや高く推移したため、初期の病勢進展が助長されたものと考えられる。	発生に応じて薬剤散布が行われた。
	アブラムシ類	—	平年並	促成、半促成栽培における発生量は全般に平年並みに推移した。	前年秋期のアブラムシ類有翅虫の飛来数はやや多かったものの、本種に卓効の薬剤が使用されたため発生量は平年並みになったものと考えられる。	定植時とその後は発生に応じて薬剤散布が行われた。